

文部科学大臣表彰

文部科学省では、子どもたちの読書活動を推進するために、特色ある優れた実践を行っている学校・園・図書館・団体（個人）に対し、その功績をたたえ文部科学大臣表彰を行っています。本県からは、以下の5団体が選ばれました。

《活動紹介》

（村山市立袖崎小学校：村山市）

袖崎小学校は、別名『洗心』の学舎（または「洗心学校」）ともいう。これは初代県令 三島通庸が、明治天皇の北海道・東北巡幸（明治13年）に先立ち下検分のために本飯田学校に立ち寄った際に揮毫した「洗心学校」に基づくものである。

この「洗心」は、儒教の經典で四書五經の一つ『易経』に由来するものであるが、同校は、校風として「図書・読書」を重視してきており、かねてより読書活動や図書館活用教育に力を入れてきた学校である。

袖崎小学校では、特徴的な読書活動・図書館利用教育に取り組んでおり、読書により「ことばの力の育成」や「豊かな心の育成」を読書活動推進によって積極的に育くもうとしている。

当該校の取組みは、「先進性（新規性）、継続性、有効性、波及性、実践性」等いずれの観点からも優れている。

【特徴1】「袖崎大好き」な子どもの育成のための「地域ブック」コーナーの設置 ～袖崎の歴史と三島通庸、おくのほそ道等～

○学校経営重点の3本柱の一つとして「ふるさと袖崎を愛する子どもの育成」（袖崎大好き）を推進しており、「ふるさとのおほんコーナー」を設置している。袖崎は「おくのほそ道」のルート上にあり、松尾芭蕉に関する本、さらには、「洗心学校」と命名した三島通庸に関する「特別授業」などにより、印象に残る効果的な教育方法を導入するなど、先進的な取組みも実践している。

【特徴2】全校あがての読書教育の推進～「全校読書」と情報センターとしての図書館の充実～

○「読書クイズ、読書スタンプラリー、本の福袋」などの活動を実施し、学校集会で図書委員が行う「おすすめ本紹介」や各学年教室に図書館分館を設置するなど、より図書が身近な存在となるよう工夫している。さらには、本や新聞を読む習慣づくり（NIE活動）にも力を入れ、全校朝読書などの取組みも導入しながら、読書の習慣化・読書推進活動を行っている。

【特徴3】児童・教員・PTAが一体となった「親子読書」と地域連携型「読み聞かせ」の推進 ～読書における家庭の協力「親子読書」と「読み聞かせ」の効用の活用～

○地域内の読み聞かせボランティア等をはじめ、地域の方々によって学校図書館・児童の読書活動が支えられている。地域や家庭と連携しながら、読書に親しむ習慣づくりに結びつけている。また、月ごとの年間計画を立て、長期休暇以外は毎月、読み聞かせ等を実施している。

【特徴4】市立図書館と市教委等の連携 ～移動図書館車（ブックモバイル）の積極活用等～

○公共図書館である市立図書館から約10キロ以上と離れた地域にあり、市立図書館が持つ移動図書館車「はやま号」を積極的かつ有効に利用している。

具体的には、校内貸出場所の確保、定期利用、児童への呼びかけなどの取組みを行っている。また、村山版ブックスタート「はじめの1冊」は、読書へのいざない（導入事業）として重要で、当該校でも特に大切にしている。

(山形県立山形中央高等学校)

生徒の積極的な読書活動、資料利用推進のため、総合的な探究の時間を始めとした、授業での年間を通した学校図書館の利活用を計画的に実施している。

また、生徒の読書活動を推進するため、学校独自の校内読書感想コンクールを実施し、地域との連携を図るため、コンクールの成果を毎年公共図書館や近隣書店協力のもと、展示を行っている。

読書環境づくりの取組みの工夫としては、インターネットでの蔵書検索・リクエスト予約を行い、デジタル社会に対応した手立てを図っている。さらに、学校図書館の Wi-Fi 環境を整え、更なる読書活動・学習活動の充実を目指している。

【資料利用推進について】

スポーツ科(当時体育科)による 3 年次卒業論文作成(平成 5 年度～)、及び総合的な探究の時間「未来へのドアプロジェクト」への取組み(平成 29 年度～)のため、体育・進路探究・教務部を中心とした体制の下、学校図書館を利用した情報収集や活用を進めている。スポーツ科の卒業論文・専門性に寄り添うため、スポーツの分野に関する資料は多くの書籍を広げて閲覧しやすいように、グループワークスペースに別置している。その他の資料はピクトグラムを用いることにより、探究で必要とする資料がどこにあるのか、誰でもひと目で分かるようになっている。

【校内読書感想文コンクールについて】

令和 5 年度より校内読書感想文コンクールを見直し、自身の感想や思いを得意な方法でアウトプットし表現できるよう、「感想文」「感想画」「POP」「心に残った一行」の 4 部門からの選択制とした。作品は公共図書館や地域書店に呼びかけ、展示してもらうことで連携を深め、生徒のやる気を引き出し、読書意欲を呼び起こしている。貸出冊数は年々減少傾向であったが、この新しい取組みにより歯止めがかかり、増加傾向に転じている。

【学校図書館の環境整備について】

学校図書館と情報担当教諭が連携し、学校図書館内の Wi-Fi 環境整備を行っている。このことにより生徒は、図書資料はもちろんのこと、Webサイトでも情報収集を行い、より多くの情報を得ることができている。さらに「カーリル」を利用した蔵書検索や予約・リクエストのインターネット対応を行うなど ICT 化も積極的に運用している。

(山形県立上山明新館高等学校)

当该校では図書館長・司書教諭・学校司書を中心にした体制と全教職員との連携の下、図書館を活用した授業の実践や生徒主体の読書活動を活発に行い、魅力あふれる学校図書館づくりが展開されている。

特に、図書委員会では委員長・副委員長・学年代表を中心に組織化されており、常時活動のほか、イベントの企画運営、読書活動の司会進行、書店訪問・選書会など、多岐にわたる活動を主体的かつ能動的に行っている。産業系の学科を有していることを強みに、イベント時には学科と連携するなど独自性を出しているのも特徴的である。また、多年にわたり地域と連携しながら、子どもたちに向けた「読み聞かせボランティア活動」を実施し、近年では「上山市の小学生へオススメの本」寄稿などにも取り組んでいる。

授業においては、国語科を中心に複数の教科、総合的な探究の時間などで学校図書館を活用しており、図書資料と1人1台端末を併用する等の先進的な取組みも実施している。具体的には、紙資料とインターネット情報の複合的な調べ学習や、Web蔵書検索を用いた図書探索及び読解に関する個別課題、端末のカメラ機能を使用したポスター作成等の授業を実践している。また、教科及び学年と連携しながら学校全体でビブリオバトルに取り組んでおり、生徒中心の司会進行や Google フォームを活用した投票など工夫して実施している。

授業利用時間数は令和2年度から毎年100時間を超えており、使用の際には専任の学校司書がサポートに入ることで、より充実した内容で実践できている。

これらの成果として、10年前と比較し一人当たりの年間貸出冊数は1.5倍以上増加している。また、近年ではデータベースのオンライン化やデジタルコンテンツの整備を進めており、Google クラウドの活用等を通して多様なニーズに応じている。

(白鷹町立図書館:白鷹町)

当該図書館では、昭和 62 年から定期的なおはなしの会を開催しており、親子で本に興味を持ち、図書館に親しみを持つことができるような取組みを継続している。また、令和 4 年 4 月に策定した「白鷹町子ども読書推進計画」に基づき、図書館職員、ボランティアとの連携体制のもと、「自ら進んで読書に親しむ子ども」の育成をめざし、職員が小中学校を訪問して読み聞かせを行ったり、読書感想文講座、1 日司書体験等を実施したりすることを通して学校との連携を図っており、利用者の増加につなげている。

English おはなし会のほか、郷土を知る講座、木育プログラム等、子どもが関心を寄せる多彩なイベント、新しい取組み等を積極的に数多く実施している。

これら子ども向けのイベントを周知するにあたり、ホームページは見やすいものとしているほか、定期的に発行している図書館だよりには、手書きのまんがを掲載する等、子どもの関心を集める工夫が見られる。

町内出身の寄贈者の思いを受けて寄贈図書を有効に活用するために実施している「白鷹宇宙体験隊」の取組みが、子どもに理科や科学への興味を抱かせ、読書、学習につながるとともに、ひいては子どもの夢を育む人気の取組みであり、町ならではの工夫された取組みといえる。

図書館司書が学校を訪問し、要望等に応えている。

【読書活動推進の内容】

月例おはなしの会(昭和 62 年から)、English おはなしの会(令和 4 年から)、感想文の書き方講座、読書感想文コンクール、司書体験、読み聞かせ講演会、テーマを絞った特設コーナーの設置等を実施している。

【白鷹宇宙探検隊について】

佐藤文隆文庫の活用を推進するために発足し、宇宙科学分野に興味がある小中学生を対象に学習会を行っている。子どもたちや親子対象の活動を多く取り入れ、図書館内の配置にも工夫を凝らし、令和元年のリニューアルオープンからの来館者総数が令和 5 年 7 月で 10 万人を突破した。

【図書館と学校との連携について】

平成 29 年からは司書を 2 名体制とし、町立図書館と各小中学校との連携事業を行っている。図書館職員が学校を訪問し、学校の要望に沿って、読み聞かせやブックトーク、選書等の情報提供等を行い子どもたちとの交流を深めている。また、授業の一環として子どもたちが図書館を訪れる機会を設け、図書館を身近に感じてもらい、次の利用につながるように継続して実施している。

(読み聞かせボランティアサークル あのねのね:鮭川村)

読み聞かせ等の活動を通し、子どもの読書離れの改善や、想像力の涵養、本に興味や親しみを持つきっかけづくりを目的として、平成14年から22年間活動を行っている。

鮭川村の教育委員会と健康福祉課の連携による離乳食教室(5・6か月児)に協力し、親子への読み聞かせ活動を行っており、乳幼児期からの読書習慣形成や家庭における読書の大切さを伝えることに取り組んでいる。

鮭川小学校の「お話広場」では図書ボランティアとして、鮭川中学校では図書支援ボランティアとして、両校の朝の読み聞かせの取組みに関わっており、学校における子どもの読書活動推進の取組みに協力している。

また、鮭川村に伝わる民話や伝説を題材に村在住の絵本作家とともに絵本の制作活動等を行ったり、視聴覚教材として村に伝わる民話の紙芝居と音声入りのスライドショーを自作して読み聞かせを行ったりする等、多様な子どもや大人が本や物語への興味関心を高められる魅力的な取組みとなっているほか、地域住民の関心を集め、郷土愛の醸成にも貢献している。

【学校や地域との関わり】

村内の小中学校の図書館の環境整備や選書のアドバイスをするほか、地域住民との交流の場をつくる等、読書支援を行っている。

小中学生への読み聞かせのみならず、村、社会福祉協議会、その他団体と協力し、離乳食教室に参加した親子、老人クラブ、婦人会員等への読み聞かせ活動や、親に対する読み聞かせのアドバイス等をおして、読書の習慣が重要であること伝え、幅広い読書推進活動を長く継続している。

読み聞かせ活動をとおして、地域住民のコミュニケーションの活性化、読み聞かせボランティアの活動、郷土への愛着と関心を高めており、地域の読書活動推進及び社会福祉活動に貢献している。